

られてゐる。圖中に見える所では、單なる菩提樹ではなく、佛陀が此の樹下で將に成道の所なのであり、法輪にしても、佛陀の轉法輪を示し、塔に至つては、佛陀の入涅槃なのである。此のサーンチーの額彫から、アマラーヴテ¹—Amarāvatiの柱彫に移れば、様式に差異があるにしても、内容は何等異なる所はなく、石の腰掛が美事な形になつてはゐるが、常に空しい儘であり、明かに已に傳承が出来て了つて、佛陀の大奇蹟を現はすには、之を物語る樹と輪と塔との何れかの象徴で、佛陀の現前する事を偲ぶに足りたのである。

然し、こゝに於て、前に不可解の様に見えた謎を解く鍵を得て、古代派が何時も佛陀を描寫するのを避けた理由を知るのである。之等の彫刻を造つた専門の美術家が、世尊在世中の何か他の挿話をも現はす事を努めてゐるものがあつても、傳承に遵ひ、流派の慣習を守つて、之までと全く同じ行き方で、世尊を現はすには表徴を以てし他を慎んだものと思ふ。バルハット Barhut の彫刻には、古彫刻家が銘を刻してゐて呉れるので、夫々浮彫の餘地に『龍王の世尊敬禮』(挿圖第二)とか、『阿闍世王の世尊敬禮』とかいふ事がわかるが、こゝで